

感染症定期報告感染症別文献一覧表(2013/12/1~2014/3/31) 資料 5-1

ID	感染症 (PT)	出典	概要
1	A型肝炎 B型肝炎 C型肝炎 E型肝炎 パルボウイルス感染	第59回日本輸血・細胞治療学東海支部例会 2012年11月17日	本邦における輸血後感染症に関する報告。輸血後に感染症疑いとされた症例は、2009年から2011年までの間、98件、98件及び96件といずれも100件を下回っており、3年間の感染疑い症例292例の内訳はB型肝炎121例、C型肝炎82例、細菌72例、ヒトパルボウイルスB19感染6例、サイトメガロウイルス4例、A型肝炎及びE型肝炎各2例等であった。このうち、保管検体等の調査から輸血血液との因果関係が高いと評価された症例は、B型肝炎31例、C型肝炎2例、細菌3例並びにE型肝炎、A型肝炎及びヒトパルボウイルスB19感染各1例であった。B型肝炎感染症例は7-8例/年まで減少し、2012年8月のHBc抗体検査の判定基準の変更により、今後さらに減少すると見込まれる。
2	B型肝炎	ProMED-mail 20131007.1988954	米国におけるB型肝炎の報告。ウェスト・バージニア州Harrison郡では、B型肝炎の急性症例が2013年にはいり17例確認された。急性症例はB型肝炎ウイルスに新規感染した症例で起こるとされており、同地域では例年2又は3例の報告がある。この増加は、Harrison郡における静注薬物の使用に起因すると考えられている。
3	B型肝炎 C型肝炎 HTLV-1検査陽性	第60回日本輸血・細胞治療学会東海支部例会 2013年2月9日	本邦における輸血後感染症に関する報告。岐阜県、静岡県、愛知県及び三重県の医療機関で発生した輸血後感染症について調査した結果、平成24年1月から12月までの間に、感染疑い例としてHBV11例、HCV1例、HBV/HCV1例、CMV1例及びHTLV-1感染1例が特定された。輸血された製剤の保管検体について個別NATを実施したところ、HBV陽性の検体が1件あったが、他の保管検体では個別NATの結果はいずれも陰性であった。ウインドウ期であることが否定できない献血者については再検査の実施を依頼しているが、現時点において再検査の結果はいずれも陰性であった。
4	C型肝炎	http://www.hps.scot.nhs.uk/documents/ewr/pdf2013/1343.pdf	英国におけるC型肝炎陽性者の感染経路に関する報告。スコットランドでは、2013年1月から6月までに新たに920例がC型肝炎抗体陽性と診断され、合計で34,478例が陽性と診断されている。感染経路別にみると、全体の1%が血液(凝固)因子の投与に関連しており、5%がその他の性的接触、刺青、輸血等の要因と関連していた。なお、血液因子の投与により感染した患者は、製剤に熱処理が導入された1980年代中頃以前に感染したと考えられる。
5	E型肝炎	Emerg Infect Dis. 10(2013)1664-1666	米国の注射薬物使用者におけるE型肝炎ウイルス(HEV)感染率に関する報告。2009年3月から2010年6月までに、カルフォルニア州サンディエゴに在住者であり、6か月以内に注射薬物を使用した18~40歳対象に、HEV IgG抗体の有無を調査した。その結果、対象者508例のうち14例(2.7%)が陽性であった。受刑歴、注射器の共有、路上生活、高リスクの性行為、HIV感染の有無とHEV IgG抗体陽性の間に関連は認められなかった。
6	E型肝炎	Emerg Infect Dis. 19(2013)686-688	英国におけるE型肝炎ウイルス(HEV)感染の報告。2011年5月、42歳の女性が1週間持続する倦怠感、下痢、嘔吐等を呈して入院した。検査の結果、HEV(遺伝子型3)の感染が確認された。患者は、過去3カ月間の海外渡航歴はなく、ブタ肉製品も摂取せず、家畜への接触も認められなかった。しかし、発症4週間前に血栓塞栓症予防のために低分子ヘパリンの投与を受けていた。このことから病院内のヘパリン製剤についてHEV検査が実施されたが、いずれのバッチも陰性であった。
7	HIV感染	ProMED-mail 20131130.2082684	ヒト免疫不全ウイルス1型(HIV-1)のサブタイプと疾患進行の関連性についての報告。ギニアビザウにおいて152例のHIV-1陽性患者のサブタイプを決定し、セロコンバージョンから死亡までの時間との関連を調査した。その結果、各サブタイプの割合は、CRF02_AGで53%、A3で29%、並びにA3/02(A3とCRF02_AGの組換え)で13%であり、死亡までの推定期間はそれぞれ、CRF02_AGで6.2から9.2年、A3で7.2から11.3年、並びにA3/02で5.0から8.0年であった。感染者のHIV-1サブタイプを決定することが、感染の管理において重要である可能性がある。

ID	感染症 (PT)	出典	概要
8	インフルエンザ	61回日本ウイルス学会 学術集会2013年11月 10～12日 O2-2-09	ベトナムのブタ農場における豚インフルエンザウイルス(SIV)感染状況に関する報告。2010年8月から2012年12月までに、ベトナム北部3省の261の農場及び10のと畜場の健康なブタから採取された鼻腔拭い液4675検体を対象にリアルタイムPCR法によるスクリーニングを実施した。その結果、14戸の農場の12週齢以下の離乳ブタ及び肥育ブタからH1N1亜型28株、H1N2亜型43株、H3N2亜型62株のSIVが分離された。また、すべてのH1N1亜型はインフルエンザA(H1N1)pdm09型であった。
9	インフルエンザ	http://www.who.int/influenza/human_animal_interface/Influenza_Summary_IRA_HA_interface_16December13.pdf	米国におけるインフルエンザA(H3N2)変異型(以下、H3N2v)感染の報告。2013年10月7日から12月16日までの間に、アイオワ州から新たにH3N2v感染1例が報告された。2013年において米国国内では19例のH3N2v感染が報告されている。全症例が発症前にブタとの接触があったことが確認されている。継続的なヒト-ヒト感染は確認されていない。
10	インフルエンザ	http://www.cdc.gov/flu/weekly/weeklyarchives2012-2013/weekly41.htm	米国におけるインフルエンザA(H3N2)変異型(以下、H3N2v)感染の報告。2013年10月、米国疾病予防管理センターは、2013-2014年シーズン(2013年9月29日開始)における初めてのH3N2v感染1例がアイオワ州から報告されたことを明らかにした。症例は発症前にブタとの接触が認められており、現時点でヒトからヒトへの感染が疑われる事例がないことなどについて記載されている。
11	インフルエンザ	ProMED-mail 20130830.1914050	米国におけるインフルエンザA(H3N2)変異型(以下、H3N2v)感染の報告。2013年8月上旬、ミシガン州の農業フェアに参加した小児1例においてH3N2v感染が確認された。ミシガン州では2013年になってはじめてのH3N2v感染症例である。農業フェアで展示されていたブタについて検査が実施され、H3N2v陽性のブタが確認された。
12	鳥インフルエンザ	ProMED-mail 20131114.2055317	台湾における鳥インフルエンザA(H6N1)型(以下、H6N1)感染に関する報告。2013年5月、20歳の女性がインフルエンザ様の症状により入院し、検査の結果、咽頭スワブ検体からH6N1が単離された。遺伝子解析の結果、血球凝集素タンパク質のアミノ酸配列置換(G228S)が認められ、これによりヒト α 2,6シアル酸受容体に対する親和性が亢進した可能性が考えられた。
13	インフルエンザ	MMWR. 62(2013)1032-1036	米国におけるインフルエンザの発生状況に関する報告。2013年9月28日から12月7日までの間にインフルエンザの検査を受けた61,261例のうち4,183例が陽性であった。インフルエンザA型に感染していた3,819例のうち1,998例についてウイルスのサブタイプが特定され、1,800例がインフルエンザA(H1N1)pdm09型及び198例がインフルエンザA(H3)型であった。
14	インフルエンザ	MMWR. 62(2013)838-842	米国におけるインフルエンザの発生状況に関する報告。2013年5月19日から9月28日までの間、米国におけるインフルエンザ感染の報告は少ない状態であった。2013年6月、インディアナ州においてインフルエンザA(H3N2)変異型(以下、H3N2v)の2013年度で初めての感染者が確認された。その後、9月28日までにH3N2v及びインフルエンザA(H1N1)変異型の感染者として計20例が確認された。
15	インフルエンザ	http://www.phac-aspc.gc.ca/tmp-pmv/notices-avis/notices-avis-eng.php?id=121	中国における鳥インフルエンザA(H10N8)型(以下、H10N8)感染の報告。2013年12月、中国保健当局は世界保健機関(WHO)に対し、江西省において1例のH10N8感染症例を確認したことを報告した。中国でH10N8感染が確認されたのはこれが初めてである。現在、中国政府はWHOと密に連携して対応している。また、ヒトからヒトへの継続的な感染は確認されていない。
16	インフルエンザ	WHO Influenza at the human-animal interface. Dec. 20, 2013	中国における鳥インフルエンザA(H10N8)型(以下、H10N8)感染の報告。2013年12月17日、江西省においてH10N8感染による死亡1例が確認され、世界保健機関へ報告された。この症例は、基礎疾患を有する73歳の女性で免疫抑制状態にあり、11月30日に重症肺炎で入院し、12月6日に死亡した。なお、発症前に生きた家禽への曝露歴があることが確認されている。本症例との接触者からはこれまでに当該ウイルスは検出されていない。

ID	感染症 (PT)	出典	概要
17	鳥インフルエンザ	J Infect. Dec. 31, 2013[on line]	中国における鳥インフルエンザA(H10N8)型(以下、H10N8)感染の報告。2013年12月17日、江西省においてH10N8感染による死亡1例が確認され、世界保健機関へ報告された。この症例は、基礎疾患を有する73歳の女性で免疫抑制状態にあり、11月30日に重症肺炎で入院し、12月6日に死亡した。なお、症例は生きた家禽を扱う市場をたびたび訪れ、発症の4日前にも訪れていたという。中国では、これまでにH10N8は野鳥や家禽から分離されてきたが、患者から分離されたのは初めてである。
18	鳥インフルエンザ	ProMED-mail 20131217.2121718	中国における鳥インフルエンザA(H10N8)型(以下、H10N8)感染の報告。2013年12月17日、江西省においてH10N8感染による死亡1例が確認され、世界保健機関へ報告された。この症例は、基礎疾患を有する73歳の女性で免疫抑制状態にあり、11月30日に重症肺炎で入院し、12月6日に死亡した。なお、発症前に生きた家禽への曝露歴があることが確認されている。本症例との接触者からはこれまでに当該ウイルスは検出されていない。
19	ウエストナイルウイルス感染	JAMA. 310(2013)297-307	米国におけるウエストナイルウイルス(WNV)感染の報告。テキサス州ダラス(人口240万人)において、2012年5月30日から12月3日までのWNV流行に関する調査を実施した。その結果、ウエストナイル熱225例、ウエストナイル神経侵襲性疾患(WNND)173例、WNV陽性献血者17例、死亡19例が特定された。2012年のWNNDの発生率は10万人あたり7.30であり、2006年の10万人あたり2.91と比較して明らかに大きく、過去最大であった。また、過去11年間のダラスにおけるWNNDの対数変換年間有病率は、12月から2月までの間の-2.2℃以下であった日数と反比例していた。
20	コンゴ・クリミア出血熱	ProMED-mail 20130630.1800292	ブルガリアにおけるコンゴ・クリミア出血熱(CCHF)の報告。2013年6月、Kurdzhali州の病院に2例のCCHF患者が入院した。2例ともダニに咬まれていることが確認されている。病院の医師の話では、2013年は降雨量が多いことが影響してCCHFの報告が特に多いという。
21	コンゴ・クリミア出血熱	ProMED-mail 20131007.1988889	パキスタンにおけるコンゴ・クリミア出血熱(CCHF)の報告。2013年9月、カイバル・パクトウンクワ州Haripurにおいて、食肉加工に従事する4例がCCHFにより死亡した。4例とも発症前にヒツジの肉を食肉処理しており、そのヒツジはアフガニスタンから持ち込まれたものであることが判明している。Haripur当局は直ちに、7日間の食肉加工の禁止と、食肉加工場及び販売店の消毒を行った。
22	デング熱	ProMED-mail 20131023.2016569	マレーシアで発見された新規のデングウイルスに関する報告。2007年、サラワク州で発生したデング熱集団感染の際に収集されたサンプルから、系統発生的に既知の4種のウイルスとは異なる新種のデングウイルスが発見された。この新規のウイルスに対して産生されるサル抗体は、既知のデングウイルスのものと著しく異なっていた。現時点で、この新たなデングウイルスは、サラワク州の森林のマカクにおいて循環している可能性が疑われている。
23	デング熱	厚生労働省 2014年1月10日	デング熱の国内感染疑い例に関する、厚生労働省から各都道府県宛での情報提供及び協力依頼。2013年8月下旬に日本を周遊して帰国したドイツ人について検査を実施した結果、デング熱に感染していたことが確認された。専門家らによる検討の結果、日本国内で感染した可能性が否定できないとの結論に至った旨、情報提供がなされた。また、医療機関関係者等に対して、海外渡航者への注意喚起と、海外からの帰国者に発症者がある場合には保健所への報告を行うよう協力依頼がなされた。

ID	感染症 (PT)	出典	概要
24	パルボウイルス感染	Transfusion. 53(2013)2556-2566	本邦におけるパルボウイルスB19(B19V)感染のリスク低減に関する報告。2008年2月から2011年9月までの北海道における1,035,560件の献血について化学発光酵素免疫測定法(CLEIA-B19V)による検討を行った結果、417件(0.04%)がB19V陽性であり、このうち101件(全体の0.01%)はB19V DNAも陽性であった。また、CLEIA-B19Vの血漿スクリーニングを導入した2008年以降、日本全国のドナーからの772プールにおけるB19V DNA量は4logIU/mLを超えなかった。これは、CLEIA-B19Vのスクリーニングにより、米国及び欧州のB19Vに関する勧告に対応することができることを示している。
25	パルボウイルス感染	Transfusion. 53(2013)2585-2591	ヒトパルボウイルス4(PARV4)の不活化に関する報告。ウイルスゲノムの外在化(カプシドの外にDNAが出ること。)を間接的な指標として、液状加熱及び低pH処理によるPARV4の不活化について検討した。その結果、液状加熱及び低pH処理に対して、PARV4はパルボウイルスB19よりも抵抗性を示したが、マウス微小ウイルスほどの抵抗性は示さなかった。また、2価陽イオンの非存在下では中性pHでもPARV4は不活化された。2価陽イオンはPARV4を安定化する効果があると考えられた。
26	ウイルス感染	Emerg Infect Dis. 20(2014)211-216	南スーダン又はウガンダにおいて確認された新規パラミクソウイルスの報告。南スーダン及びウガンダにおける調査から帰国した米国人から新規のパラミクソウイルスが検出され、暫定的にSosuga virusと命名された。症例は、調査地においてげっ歯類及びコウモリを捕獲していた。症例は、発熱、倦怠感、関節痛、広範囲の発疹及び出血を呈して入院したが、14日後に退院した。症例から分離されたウイルスについて解析を行った結果、新規のパラミクソウイルスであると確認された。
27	ウイルス感染	Emerg Infect Dis. 19(2013)756-763	中国の家畜における重症熱性血小板減少症候群ウイルス(SFTSV)に関する報告。2011年4月から11月までに、山東省の二つの郡において計3,039頭の家畜から標本を採取した。SFTSVに対する抗体は、ヒツジの69.5%(328頭/472頭)、ウシの60.5%(509頭/842頭)、イヌの37.9%(136頭/359頭)、ブタの3.1%(26頭/839頭)及びニワトリの47.4%(250頭/527頭)から検出された。また、SFTSVのRNAはすべての動物種で検出されたが、陽性率は1.7~5.3%であった。ヒツジ、ウシ及びイヌから分離されたSFTSVは同地域でヒトから分離されたウイルスと95%を超える配列相同性を示した。様々な家畜を宿主としてSFTSVの自然感染が起きており、ウイルスが広い宿主域をもつことが示された。
28	ウイルス感染	PLoS One 8(2013)e70137	中国の子ブタから分離された新規ピコルナウイルスに関する報告。河北省の農場の生後30日以内の子ブタの糞便検体から新規ピコルナウイルスが分離され、PLV-CHNと命名された。遺伝子配列を解析した結果、PLV-CHNとswine pasivirus1(SPaV-1)の相同性は82%であった。また、RT-PCR検査の結果、健康な子ブタ180頭のうち36頭(20%)がPLV-CHN陽性であったが、ヒト(健康小児100例、下痢の小児100例及び脳炎の小児196例)において陽性例はなかった。しかし、PLV-CHNのVP1ペプチドに対する抗体を用いたELISAの結果によると、健康なヒトにおける陽性率は63.5%(526例中334例)であり、年齢により陽性率に差が認められた。
29	ウイルス感染	ProMED-mail 20130802.1860724	米国におけるJamestown Canyon virus(JCV)及びPowassan virus感染の報告。ニューハンプシャー州において、同州ではこれまで報告のなかった2つのウイルスに男性1例が重感染していることが確認された。検査の結果、JCV及びPowassan virusの両ウイルスへの感染が確認された。JCV感染による症状は軽いが、中枢神経系に関連する場合には中等度から高度となる。Powassan virusはダニの咬傷により感染することが知られており、米国及びカナダにおいて過去50年間に60例程の症例報告がある。

ID	感染症 (PT)	出典	概要
30	ウイルス感染	第61回日本ウイルス学会学術集会 2013年11月10～12日、O1-6-12	重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の血清診断法に関する報告。SFTSの原因ウイルス(SFTSV)感染細胞又は組換え核蛋白質(rNP)を用いたSFTSの血清診断法を開発し、その有用性を評価した。SFTSV感染細胞を抗原とした間接蛍光抗体法(IFA)及びIgG-ELISAにより、患者の回復期血清から抗SFTSV抗体が検出された。一方、SFTSVのrNPを発現させたHeLa細胞を用いたIFA及びIgG-ELISAでも抗SFTSV抗体が検出可能であったが、抗体価は低く、感度も低かった。SFTSV感染細胞を抗原とした血清学的診断法は、SFTSV感染のサーベイランスに有用であると考えられた。
31	ウイルス感染	第61回日本化学療法学会西日本支部総会・第56回日本感染症学会中日本地方学術集会・第83回日本感染症学会西日本地方学術集会。2013年10月26-27日、112	本邦における重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の報告。2013年4月、60歳の女性が自宅で倒れているところを発見されて搬送された。白血球数及び血小板数の低値と、AST、ALT及びLDHの高値を認めた。発症前にダニに咬まれていたことからSFTSの可能性が考えられ、入院4日目にRT-PCR法によりSFTSVウイルス遺伝子が陽性と判明した。その後、ダニはタカサゴキアラマダニと判明し、虫体及び患者血清からSFTSVウイルスが分離された。タカサゴキアラマダニからSFTSVウイルスが検出されたのは世界で初めてである。
32	サイトメガロウイルス感染	Biol Blood Marrow Transplant. 19(2013)1719-1724	造血幹細胞移植(HSCT)患者で使用される輸血製剤に対する、サイトメガロウイルス(CMV)検査の必要性に関する報告。カナダにおいて、1999年10月から2012年6月までに同種HSCTを受けた患者のうち、ドナー及びHSCT患者ともにCMV陰性であった166例を対象に調査を行った。2007年1月より前にHSCTを受けた患者89例は、白血球除去及びCMV検査で陰性が確認された製剤を輸血されており、うち3例(3.4%)で輸血後のCMV血症が認められた。一方、2007年1月以降にHSCTを受けた患者77例では、白血球除去のみが施された製剤を輸血されており、うち1例(1.3%)で輸血後のCMV血症が認められた。HSCT患者で使用される血液製剤に対して、CMV検査の実施は不要であると考えられた。
33	サイトメガロウイルス感染	Transfusion. 53(2013)2190-2197	本邦の献血者におけるサイトメガロウイルス(CMV)抗体陽性率と、CMV輸血感染リスクに関する報告。献血者から採取した全血2,400検体中の抗CMV抗体を調べた結果、陽性率は20歳代で58.3%、30歳代で73.3%であった。また、血球分画中のCMV DNAは60歳未満の献血者の1.0%、60歳代の献血者の4.3%から検出された。DNA陽性検体の14%では血漿中にもCMV DNAが含まれ、そのような献血由来の白血球除去後の血漿製剤も、またCMV DNAを含んでいた。血漿からCMV DNAが検出される献血におけるCMV輸血感染リスクの研究が必要である。
34	サイトメガロウイルス感染	Transfusion. 53(2013)2183-2189	サイトメガロウイルス(CMV)輸血後感染のリスク低減に関する報告。ドイツにおいて献血から得られた全血検体22,904件を対象にCMV DNAを検査した結果、21件(0.09%)がCMV DNA陽性であった。CMV DNA陽性検体のうち、新規抗体陽性ドナーのCMV DNA量のレベルは高く、全血中で1,000IU/mL以上、血漿中で100IU/mL以上であった。一方、抗体陰性ドナー及び長期抗体陽性ドナーのCMV DNA量はこの水準を超えることはなく、両ドナーともに低かった。新規抗体陽性ドナーからの献血はCMV感染リスクが増大する一方、抗体陰性ドナー及び長期抗体陽性ドナーからの血液製剤は、感染リスクのある患者のために使用することができると考えられた。
35	パラインフルエンザウイルス感染	J Gen Virol. 94(2013)2184-2190	ブタの新規パラミクソウイルスに関する報告。中国のブタから新規パラミクソウイルスが発見され、ブタパラインフルエンザウイルス1(PPIV-1)と命名された。死亡した386頭の豚を対象としたRT-PCR検査の結果、PPIV-1は死亡したブタの鼻咽喉頭スワブ検体の3.1%(12/386)及び直腸スワブ検体の0.7%(2/303)から検出された。全ゲノム解析の結果、PPIV-1はヒトパラインフルエンザウイルス1及びセンダイウイルスに近縁であった。
36	風疹	第45回日本小児感染症学会総会・学術集会。2013年10月26-27日、F-1-8	本邦における風疹の発生状況に関する報告。2012年から2013年にかけて、日本国内では風疹が例年にないほどに流行している。2013年の大阪府における累積患者報告数は、第21週時点で1,862例と国内で2番目に多く、昨年同時期の約30倍の数値である。このうち73%は男性であり、20～30歳代が多数を占めている。患者のワクチン接種歴は「2回」が0.8%、「1回」が5.0%、「なし」が30.6%、「不明」が63.6%であった。2012年12月から2013年5月までの間に大阪府内で2例の先天性風疹症候群が報告された。うち1例では継続的な検査が実施されており、咽頭ぬぐい液から感染性のあるウイルスの排出が認められた。

ID	感染症 (PT)	出典	概要
37	風疹	日本公衆衛生雑誌 60(2913)173/第72回日本公衆衛生学会総会. 2013年10月23日-25日, O-0101-1	本邦における風疹の発生状況に関する報告。2012年から2013年にかけて、日本国内では風疹が例年にないほどに流行している。大阪府内の風疹患者報告数は、全数把握が始まった2008年～2010年は年間10～20例程度で推移していた。2011年は54例、2012年は408例と次第に増加し、2013年は第21週時点で1,700例を超えた。風疹ウイルスの遺伝子型を検査した結果、2012年前半は遺伝子型2B、中盤以降は1E及び2Bが混在していた。従来日本では稀であった遺伝子型1E及び2Bが近年日本に侵入し流行が拡大したと考えられた。
38	クロイツフェルト・ヤコブ病	http://www.ema.europa.eu/docs/en_GB/document_library/Scientific_guideline/2013/11/WC500155484.pdf	欧州医薬品庁が公表した、尿由来医薬品における外来性物質の安全性に関するガイドライン。本文書では、ヒト尿由来医薬品のウイルス及び伝達性海綿状脳症 (TSE) に係る安全性評価において考慮すべき事項として、次の項目を挙げて説明している。1. ドナーの選択 2. プロセス (抽出、沈殿、精製工程等) 3. 製造プロセスにおけるウイルスバリデーション試験 4. ウイルス及びTSEに係る全般的議論
39	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	Emerg Infect Dis. 20(2014)114-117	異型クロイツフェルト・ヤコブ病 (vCJD) 患者の血液成分の感染価評価に関する報告。vCJD確定患者1例の血液分画 (赤血球、血漿又は白血球) を、ウシプリオンタンパク質 (PrP) を過剰発現するトランスジェニック (tgBov) マウスの脳内に注入した。コントロールのtgBovマウスでは臨床徴候又は異常型PrPの蓄積は観察されなかった。しかし、血液分画を注入されたtgBovマウスのうち1～3匹/24匹で異常型PrPが陽性であった。これらの結果等から求めた患者の全血の総感染価は4.45 ID/mL程度であると推定された。
40	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	http://ansm.sante.fr/S-informer/Points-d-information-Points-d-information/Risque-de-transmission-par-le-sang-de-la-maladie-de-Creutzfeldt-Jakob-evolution-de-l-analyse-de-risque-depuis-15-ans-Point-d-Information	フランスにおける異型クロイツフェルト・ヤコブ病 (vCJD) の血液による感染リスクに関する総説。本文献は、1990年から2010年までの間に、フランス当局がvCJDの血液による感染リスクをどのように分析、評価してきたかをまとめた総説である。また、フランスではこれまでに27例のvCJD症例が同定されているが、最新の予測では60年間で計100例程度の症例が発生するとされている。
41	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	http://www.bmj.com/content/347/bmj.f5675/2013/10/15	英国における虫垂検体スクリーニングによる異常プリオンタンパク質 (PrP) 陽性率の報告。2000年から2012年までに行われた手術で得られた虫垂32,441件を対象に免疫組織化学法による検討を行った結果、16件がPrP陽性であった。これは、人口100万人当たり493例がPrP陽性があることに相当する。また、プリオンタンパク質遺伝子 (PRNP) のコドン129について、陽性16検体のうち8件はメチオニンのホモ接合体、4件はバリン-メチオニンのヘテロ接合体、4件がバリンのホモ接合体であった。これは、異型クロイツフェルト・ヤコブ病症例のすべてにおいて、PRNPのコドン129がメチオニンのホモ接合体であることと対照的である。
42	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	http://www.bmj.com/content/347/bmj.f5994	ヒトの虫垂及び扁桃腺における異常プリオンの蓄積に関する総説。英国において、手術で切除された虫垂を対象に異常プリオンの蓄積の有無を検討した結果、陽性検体の割合は2000分の1又は4000分の1であった。虫垂の異常プリオンは疾患特異的でない可能性があるため、現在、牛海綿状脳症の発生前の1970年代の虫垂検体について同様の調査が進められている。異常プリオンの感染が広範であれば、血液製剤の安定供給のための予防的措置 (白血球除去、特定患者の除外、原料血の国外からの供給) は長期継続されるであろう。一方、切除された扁桃腺における異常プリオンの蓄積の有無を検討した結果、陽性検体は認められなかった。
43	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	OIE Jan. 23, 2014	ドイツにおける異型クロイツフェルトヤコブ病に関する報告。ドイツのBSE監視システムによって、1頭のBSE例が特定された。このウシは10歳5カ月で殺処分されており、その時点で臨床症状は認められなかったが、検査の結果、L型BSE陽性であることが判明した。このウシは食肉流通される前に発見されたため、ヒトの健康に影響はない。疫学調査が実施された結果、このウシの子孫7頭が特定され、うち5頭は既に殺処分されていたが、残り2頭も屠殺及び処分された。

ID	感染症 (PT)	出典	概要
44	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20140118.2182518	ドイツにおける異型クロイツフェルトヤコブ病に関する報告。2014年1月17日、国際獣疫事務局は、稀なタイプのBSEのウシがドイツで発見されたことを公表した。ドイツ北東部のブランデンブルク州の農場において、10歳のウシがL型BSEに陽性であることが判明した。このウシは食肉流通される前に発見されたため、ヒトの健康に影響はない。このウシの子孫7頭が特定され、うち5頭は既に殺処分されていたが、残り2頭も屠殺及び処分された。
45	レンサ球菌感染	Emerg Infect Dis. 19(2013)330-331	米国におけるブタレンサ球菌感染の報告。ミネソタ州の60歳の男性が激しい頭痛と悪寒のため受診した。患者由来の脳脊髄液及び血液培養の4検体中2検体からブタレンサ球菌が検出された。患者はブタを輸送するトラック運送会社に勤務していた。患者は、ブタを積み下ろす際、防塵マスクをあまり着用していなかった。
46	レンサ球菌感染	ProMED-mail 20140210.2269028	ベトナムにおけるブタレンサ球菌感染の報告。タイビン省の48歳の男性が tiet canh (ブタの血液と肉を混ぜた料理) を喫食した後、ブタレンサ球菌に感染して死亡した。男性は、2014年1月28日、健康なブタを食肉処理し、その翌日に高熱、戦慄、消化器異常等を呈した。その後、ショック状態に陥り、医療機関を受診したが、死亡した。2014年2月7日、検査が行われ、ブタレンサ球菌に対して陽性と判定された。
47	レンサ球菌感染	Revista Chilena de Infectologia. 30(2013)557-561	チリにおけるレンサ球菌による急性髄膜炎の報告。54歳女性及び48歳男性が急性髄膜炎を発症した。両症例の髄液からブタレンサ球菌血清型2が検出された。両症例とも臨床経過は良好で、退院時に神経学的変異はなかった。また、遡及的調査により、両症例とも養豚の仕事に従事していることが判明した。
48	大腸菌性胃腸炎	日本獣医師会雑誌. 67(2014)73-78	本邦における仔ウシの口腔内の志賀毒素産生性大腸菌 (STEC) の保有状況に関する報告。山口県のある農場で飼養される仔ウシ200頭 (12か月未満186頭、12か月以上14頭) について検査を実施した結果、12か月未満の仔ウシ24頭から27株のSTECが分離され、うち13株がO26であった。O26とO111分離株のパルスフィールド電気泳動の結果は同一か類似したパターンであり、農場内で水平伝播した可能性が示唆された。
49	大腸菌感染	Can J Public Health. 103(2012)322-326	カナダにおける志賀毒素産生性大腸菌 (STEC) 感染の報告。オンタリオ州で開催された親族会において、59例の参加者にブタの丸焼き等の料理がふるまわれ、うち29例が胃腸障害を発症した。発症した29例のうち11例からSTEC O157:H7が検出され、同じ菌はブタ肉料理からも検出された。ブタの丸焼きのような大型片の食肉を屋外で調理する場合は別段の注意を払わなければならない。
50	腺ペスト	ProMED-mail 20130829.1909839	キルギスにおける腺ペスト感染の報告。2013年8月27日、キルギス当局は、Issyk Kul県の15歳の男児1例が腺ペストにより死亡したことを明らかにした。患者は、マーモセットが運ぶノミの刺傷を受けた後に感染したと考えられている。また、この患者と接触していた同じ村の3例が腺ペストの症状を呈している。
51	野兔病	MMWR. 62(2013)963-966	米国における野兔病の発生状況に関する報告。2001年から2010年までの間に、米国疾病対策センターへ報告された野兔病感染疑い例は1,208例であった。年齢別では、5~7歳の小児及び65~69歳の高齢者で感染者が多かった。また、州別では、ミズーリ州 (231例)、アーカンソー州 (162例)、オクラホマ州 (108例)、マサチューセッツ州 (84例)、サウスダコタ州 (65例) 及びカンザス州 (59例) からの報告が多かった。

ID	感染症 (PT)	出典	概要
52	野兔病	ProMED-mail 20130905.1926007	米国における野兔病感染の報告。マサチューセッツ州Nantucketの保健局は、島内で野兔病感染者4例を確認したことを明らかにした。保健局は、島民に対して、死んだウサギや方向感覚を失った動物に触れないよう注意を促した。
53	野兔病	ProMED-mail 20130906.1926107	オランダにおける野兔病感染の報告。オランダの農務当局は、2013年9月5日、国際獣疫事務局に対し、死亡したヤブノウサギ <i>Lepus europaeus</i> の1羽において野兔病感染が確認されたことを報告した。
54	野兔病	ProMED-mail 20130919.1954010	ロシアにおける野兔病感染の報告。ハンティ・マンシースク市保健局によると、域内で野兔病感染者900例が確認された。ロシア政府の保健当局は、ハンティ・マンシースクにおける野兔病の感染拡大は重大であるとして、非常事態を宣言した。
55	梅毒	ProMED-mail 20131218.2122331	米国における梅毒の報告。ネバダ州Wahoe郡の保健当局によると、梅毒の症例数が1年で約2倍に増加した。周辺のカリフォルニア州、オレゴン州でも症例が増加している。現時点で、梅毒は主にホームレス、静注薬物使用者、男性と性的関係を持つ男性等において発生している。また、この地域では、梅毒とHIVに同時に感染している症例が報告されている。
56	リケッチア症	N Engl J Med. 369(2013)1178-1180	中国における新種のリケッチア <i>Candidatus Rickettsia tarasevichiae</i> 感染の報告。2012年5月から8月までに、ダニに咬まれた計251例の患者が中国東北部の病院を受診し、検査の結果、5例で <i>Candidatus R. tarasevichiae</i> 感染が確認された。5例の年齢は12歳～56歳で、発熱、無力症、食欲不振、悪心、頭痛、痂皮及びリンパ節腫脹を呈して入院した。患者の1例は髄膜炎様症状を呈し、4日後に死亡した。いずれの患者も発疹を伴わなかったため、当初誤診されていた。
57	リケッチア症	ProMED-mail 20131101.2033025	ロッキー山紅斑熱に類似した未知の疾患に関する報告。カリフォルニア州Contra Costa郡の衛生当局は、ロッキー山紅斑熱に類似の従来知られていなかった感染症の伝播にダニが関与すると考えられることを明らかにした。これまでに同州において4例の感染が確認されており、うち2例がContra Costa郡で報告されている。また、ライム病の伝播に関連するダニ <i>Ixodes pacificus</i> が、回帰熱の原因となる <i>Borrelia miyamotoi</i> も伝播する可能性があることが確認された。これまでに同州において <i>Borrelia miyamotoi</i> 感染の報告はない。
58	アシネトバクター感染	http://www0.nih.go.jp/niid/idsc/iasr/34/402j.pdf	本邦における多剤耐性菌感染の報告。2013年5月、愛知県内の病院に入院していた60代の男性の血液から多剤耐性菌が検出され、検査の結果、TMB-2カルバペネマーゼを産生する <i>Acinetobacter soli</i> の可能性が高いとされた。患者は土木工事中に受けた外傷の治療のために入院していた。TMB-2カルバペネマーゼを産生する菌の分離は本報告が3例目であり、 <i>A. soli</i> として分離されたのは本報告が1例目である。検出された初期の段階で医療機関内で適切な感染対策が取られ、患者間の伝播は発生しなかった。
59	カンピロバクター感染	Vector Borne Zoonotic Dis. 14(2014)1-19	ウシからヒトへ感染しうる人畜共通感染症に関する総説。人畜共通感染症の原因となる45種類の病原体について文献調査を行い、計135例の症例報告を含む文献が同定された。公衆衛生に重要な影響を及ぼす疾患として、カンピロバクター感染、ウシ結核、腸管出血性大腸菌感染、プリオンによる変異型クロイツフェルト・ヤコブ病などについて検討がなされている。
60	クレブシエラ感染	ProMED-mail 20130712.1822435	ブラジルにおける多剤耐性細菌感染の報告。交通事故により死亡した女性から肝又は腎の臓器提供を受けた患者3例の全例が、 <i>Klebsiella pneumoniae carbapenemase</i> (KPC)産生多剤耐性細菌に感染して死亡した。臓器を摘出した医師の話では、ドナーの腹腔内に膿の混じった体液が確認されたが、敗血症の症状はなかった。臓器を浸した灌流液からKPCを産生する多剤耐性細菌が検出された。

ID	感染症 (PT)	出典	概要
61	パストツレラ感染	Brazilian Journal of Microbiology 44(2013)473-474	スペインにおけるパストツレラ感染の報告。ウエスカ県において、37歳男性が入院し、再発性髄膜炎と診断された。患者は養豚場で働いており、入院の8日前にブタに噛まれ、また4か月前にはブタ連鎖球菌性髄膜炎と診断されていた。検査の結果、篩板部位に病変がみられることから、ブタの咬傷ではなく、当該部位が感染経路になった可能性が高い。
62	ヘリコバクター感染	Helicobacter 19(2013)65-68	Helicobacter canisがヒツジを宿主とする可能性を示唆した研究報告。H. canisは、ヒト、イヌ及びネコにおいて肝胆道疾患及び胃腸疾患と関連することが知られている。今回、ヒツジの便を用いて微好気性培養を行ったところ、H. canisの分離が確定した。この結果は、H. canisの人畜共通感染及び食品由来感染においてヒツジが重要な宿主となる可能性を示している。
63	回帰熱	Am J Trop Med Hyg. 89(2013)460-461	本邦における初の回帰熱輸入症例の報告。2010年10月、20歳の女性が周期性の発熱と下腿痛のため受診し、検査の結果、Borrelia persicaの感染が確認された。患者は発症の1か月前、ウズベキスタンに滞在しており、その際、ダニに咬まれていた。ミノサイクリン100mg × 2/日を10日間投与され、周期的な発熱は消失した。
64	真菌感染	PLOS ONE. 8(2013)e64871	オーストラリアにおける新規アスペルギルスAspergillus felisに関する報告。A. felisが、慢性侵襲性肺アスペルギルス症のヒト1例、侵襲性真菌性副鼻腔炎のイエネコ17頭、播種性侵襲性アスペルギルス症のイヌ1頭から分離された。ヒト症例は2型糖尿病を有する56歳男性であり、関節リウマチに対して免疫抑制療法を受けていた。遺伝子配列を解析した結果、以前にA. viridinutansと同定されたヒト分離株の1つがA. felisと同定された。A. felisが分離された2症例は、posaconazole、ポリコナゾール、カスポファンギン、リボソームアムホテリシンB等に対して治療抵抗性であり、感染症は両症例で致死性であった。
65	トキソプラズマ症 トキソカラ症 肝包虫症	Parasitolog Int. 62(2013)554-560	ギリシャにおける羊及びヤギの寄生虫感染に関する報告。羊及びヤギの血清サンプル540検体を対象に検査を実施した結果、抗体陽性率は、トキソプラズマが24.5%、リーシュマニアが0%、エキノクックスが85.9%であった。また、Toxoplasma gondiiに対する抗体は、羊の28.3%(102頭/360頭)及びヤギの16.8%(30頭/179頭)から検出された。Toxocara canisに対する抗体は、羊の42.9%(155頭/361頭)及びヤギの10.1%(18頭/179頭)から検出された。
66	神経嚢虫症	J Clin Immunol. 32(2012)246	イランにおける神経嚢虫症の報告。カシヤンの37歳男性が、4か月間、頭痛と一過性の発作を繰り返していた。頭部CT及びMRIの結果、皮髄境界部に多数の多発性腫瘤病変が認められた。脳組織生検の結果、寄生虫感染による血管炎と著しい好酸球増を伴う壊死性病変が明らかとなった。ブタ肉を扱う経歴と組織生検の結果から、神経嚢虫症と診断された。アルベンダゾールによる治療の結果、一ヶ月後にはMRIの病変は著明に減少し、頭痛と発作は回復した。